今週の為替相場見通し（2020年10月19日）

総括表			先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		105.04 ～ 105.82	105.39	104.80 ～ 106.20
ユーロ	（ドル）		1.1689 ～ 1.1826	1.1718	1.1630 ～ 1.1780
（1ユーロ=）	（円）		123.02 ～ 124.86	123.49	122.50 ～ 124.00
英ポンド	（ドル）		1.2860 ～ 1.3083	1.2920	1.2800 ～ 1.3000
（1英ポンド=）	（円）	*	135.42 ～ 137.94	136.13	135.00 ～ 137.00
豪ドル	（ドル）		0.7057 ～ 0.7234	0.7078	0.7010 ～ 0.7210
（1豪ドル=）	（円）	*	74.26 ～ 76.52	74.63	73.50 ～ 76.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第一チーム　逸見 久貴

（1）今週の予想レンジ：　104.80 ～ 106.20 円

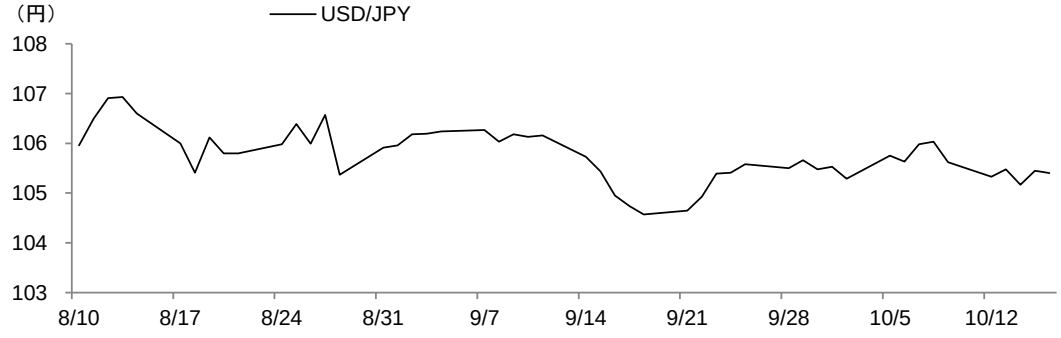
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は下落。週初、105.63円でオープンしたドル/円は、日経平均株価の軟調な推移を横目にドル/円も105.40付近まで下落。米国休日のため市場参加者が限られる中、同水準での小動きとなった。翌13日、米製薬大手がコロナワクチンの研究を中断したとの報道が嫌気され、米株先物が上値重く推移する中、リスクオフのドル買い優勢。105.60円付近まで上昇したが、ドル買いは継続せず、105円半ば付近まで押し戻された。週央14日、前日のワクチン研究中断やコロナ抗体薬治験の停止の報道を受けたリスクオフ地合いが継続し、ドル/円は105.30円付近まで下落。英・EU間のFTA交渉継続への期待感が高まると、欧州通貨全般に対しドル売りが拡大したこともあり、ドル/円は更に下落。ムニューシン財務長官から、米選挙前の経済対策合意が困難との発言も相俟って、週安値105.04をつけた。節目の105円が意識される中、新規材料に欠け、安値圏での推移が継続した。15日、仲値にかけて実需勢からのドル買いにより、105.30円付近まで値を戻した。海外時間に入り、ブレグジット交渉の停滞や欧州圏でコロナ再感染拡大への懸念が強まると、欧州通貨が売られる展開に、ドル/円は105円台半ば付近まで上昇した。週末16日、アジア株全般が軟調に推移すると、ドル/円は105.20付近まで下押しされるも、米経済指標が市場予想を上回ったことで、ドル買い地合いになると、再び105円台半ば付近まで上昇。105.39円で越週した。

今週のドル/円は105円台での小確りとした推移を予想。米追加経済対策の合意が大統領選後まで見送られたことで、市場のリスク許容度は一定程度縮小したものの、選挙後の合意への期待感は継続しており、ドル/円の下支え要因となろう。また先週は、バイデン新大統領が誕生した場合の米中関係悪化懸念後退によるCNH高がドル安圧力となっていたが、それも一服感が見えている。中国の急速な輸出の回復や、過度に為替が一方向に動くことを良しとしない中国当局が、CNH高を牽制する可能性もあり、ドル/円は確りとした推移を想定している。一方で、米大統領選（11/3）が近づく中、バイデンシナリオがメインとなっているが、前回大統領選を思い返せば、結果を見通すことは困難であり、不透明感が燻る状況下、ポジションを一方向に傾けることはリスクであろう。

（3）先週までの相場の推移

先週（10/12～10/16）の値動き：　安値 105.04 円　高値 105.82 円　終値 105.39 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　鈴木 智大

(1)今週の予想レンジ:　1.1630 ～ 1.1780　　122.50 ～ 124.00 円

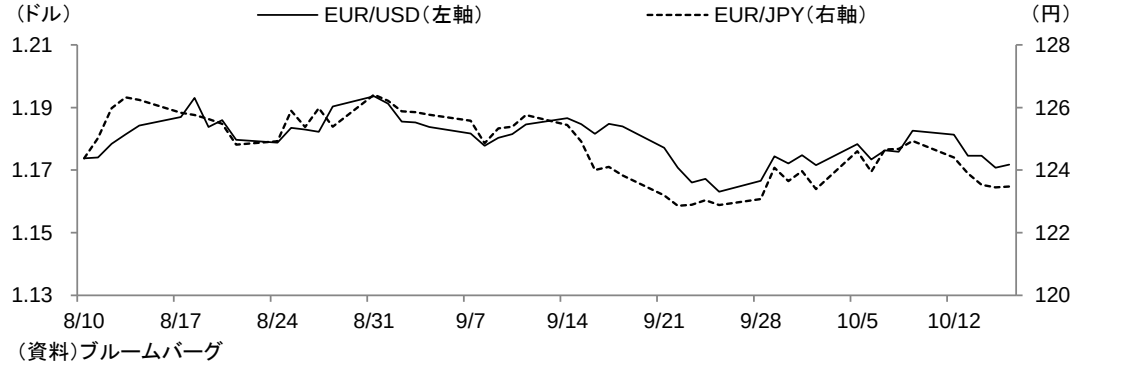
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは下落基調となり、週後半に安値を付ける展開。週初1.18台前半でオープン後、その日の東京時間につけた1.1826を高値として、ブレグジット交渉難航、欧州全体での新型コロナウイルス患者の拡大等を背景に続落する展開となった。12日は1.1815でオープン後、週高値となる1.1826付近で揉み合いながら推移。一時1.18を割り込む場面も見られたが、米国での追加経済政策への期待感後退からドル売りが進み1.18台まで回復してクローズした。13日はドイツ10月ZEW景気期待指数の予想値悪化を受けて、1.17台半ばまで急落。その後もブレグジット交渉への警戒感から軟調な推移に終始した。14日は英国とEU間でのブレグジット交渉が難航する中、ポンド売りにユーロも連れ安の流れとなり、1.17台前半まで値を下げるも、交渉決裂ではなく期限経過後の交渉可能性が高まると、下落は一服。しかしイタリアでの新型コロナウイルス新規感染者が過去最多を記録したことや、フランスの一部都市で夜間外出禁止令が発表されたこともあり、その後上値を追う展開とはならなかった。15日はフランスやドイツなど欧州主要各国での新型コロナウイルス感染拡大の懸念が高まり、欧州株価が下落したことを背景に、ユーロ/ドルも下落。ブレグジット交渉の長期化懸念も相まって、一時週安値となる1.1689まで下落。終盤に小幅に値を戻し1.17台は回復してクローズ。16日1.17台前半の揉みあいが続いたが、欧州株の上げ幅拡大を背景に一時1.17台半ばまで上昇。その後は米金利の上昇を背景としたドル買いに上値は抑えられ、じりじりと下落し結局1.1718で越週した。

今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を予想する。ブレグジットの交渉期限を通過したことによる合意無き離脱リスクの一層の警戒感、イタリアでの一日の感染者数が過去最多を記録したことや、17日に発令されたフランスの公衆衛生上の非常事態宣言による欧州各国での新型コロナウイルス再拡大を背景とした経済の停滞等、上値を抑制する材料は枚挙に暇がなく、上昇シナリオを想定しづらい状況となっている。欧州の主な経済指標として、20日(火)にユーロ圏8月経常収支、23(金)にフランス、ドイツ、ユーロ圏の10月製造業PMI速報、サービス業PMI速報の発表が予定されているが、特に注目されるのはユーロ圏製造業、サービス業PMI速報の発表であろう。欧州全体での感染者の拡大を背景に、PMI速報が予想比悪化することにより、更なる下値を試す展開も想定しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/12～10/16)の値動き:　（対ドル）安値 1.1689　高値 1.1826　終値 1.1718
（対円）安値 123.02　高値 124.86　終値 123.49



（資料）ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.2800 ～ 1.3000　　135.00 ～ 137.00 円

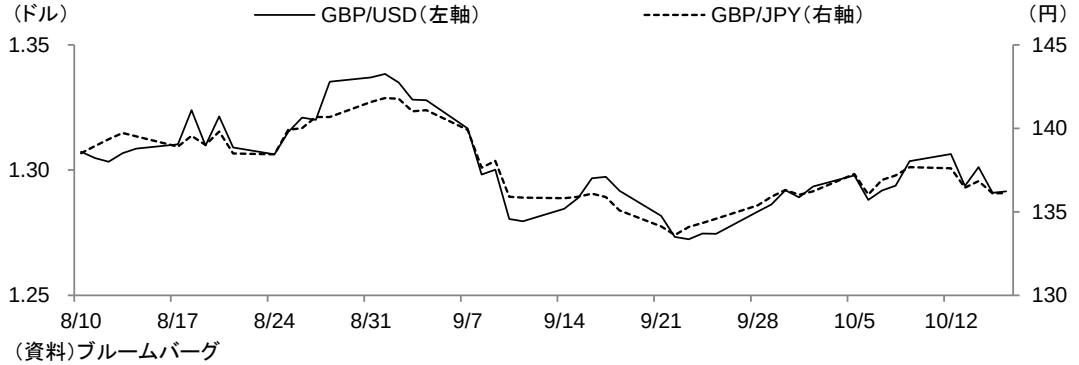
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円では、下落、反発を経て下押し。対ユーロでは、若干の上下動を経た上で、振り返って概ね横這いに終わった。ポンドとユーロが、対ドル、対円で、揃って下落したのは、英とEUの将来関係交渉の不調が、当事者を双方共に痛めたということであろう。この間、交渉成立に向けた期待感は一貫して低かったものの、EU側のバルニエ首席交渉官からの「(EU側が)最終的な詰めの作業に入れるほど十分な進展はなかった」、ジョンソン英首相からの「(合意なき離脱の)用意ができている」「恐れはない」などといった発言が、売りを招いた一方(13日)、ジョンソン首相/フォンデアライエン欧州委員長/ミシェルEU理事会議長による電話会談後、EU側がバルニエ首席交渉官に交渉継続を要請、英側が通商交渉の打ち切りはしない可能性を示唆すると大きく反発する(14日)など、ポンドは、同交渉の行方に一喜一憂する展開になった。結局、ジョンソン首相が「交渉を打ち切る期限」としていた15日のEU理事会(サミット)までに、目立った進展は何も確認されなかった。並行して、英も含む欧州のほぼ全土で新型コロナ禍が再燃、夜間外出や、行動制限が導入されたことも、ポンド、及びユーロの重石となっていたことだろう。EU理事会は16日も続いたが、ジョンソン首相が、合意なき離脱に向けた準備を本格化させることを示唆したことで、週引けに掛けポンドは全面安で推移、そのまま安値圏で週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横這いを予想。今般のEU理事会(15/16日)では、英離脱後のEUとの将来関係について、予想通り、何も決まらなかった。EU側は11月半ばまで交渉を継続させる意向を表明しているものの、そこに、「EU側から交渉を打ち切った」との印象を与えたくないという動機が少なからずあるのは間違いない。英側は英側で、仮にジョンソン首相が正式に交渉打ち切りを宣言したとしても、あくまでも脅しで、本気で合意なき離脱に踏み切るつもりはないと読まれるのがオチであろう。漁業権や関税(通関手続き)など、交渉に懸かっているものは双方共に大きいが、いずれにしても年末ぎりぎりまで結論は出ないのではなかろうか。通貨市場としても、目先、発言のいちいちに対する反応は弱まっていくものと見込まれる。また、新型コロナ禍動向や、その対策、金融政策動向なども、ポンドが本格的に材料視する可能性は低いと見込む。現時点で、欧州におけるその再燃ぶりは確かに目を引くが、その他の地域(米州、アジアなど)にしても「明日は我が身」。そこに構造的差異でも見出せない限り、今流行ってないことが決定的な買い要因になるとも思われない。ベイリー英中銀総裁は、12日、「マイナス金利導入の用意は整っていない」と早期導入の可能性を否定する発言をした。従来の文脈で言えば、ポンド押し上げ要因と読まれても不思議はなかったものの、ポンドはほぼ無反応だった。これも、市場が、「目先の材料にならない」と見ているということであろう。今週は、21日(水)に英9月CPI、英9月財政収支、23日(金)に英9月小売売上高などの主要英経済指標が発表されるが、ポンドが材料視する可能性はやはり高くないものと見込む。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/12～10/16)の値動き:　(対ドル) 安値 1.2860　高値 1.3083　終値 1.2920
(対円) 安値 135.42　高値 137.94　終値 136.13



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　安藤 愛

(1)今週の予想レンジ:　0.7010　～ 0.7210　　73.50　～ 76.00　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

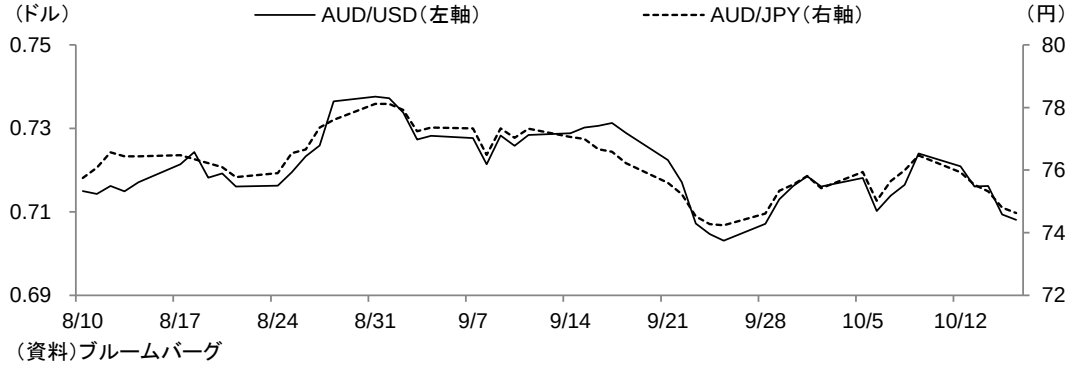
先週の豪ドル相場は利下げ観測の高まりを背景に0.70台まで下落。週末に中国人民銀行が金融機関に課していたFXフォワード取引を行う際の法定準備金を撤廃することを発表したことを受け、12日、豪ドルは0.7220近辺まで下落してギャップオープン。その後は0.7220を挟みもみ合い。13日、中国当局が豪州産石炭の輸出停止を口頭で通達との報道があったが、0.7210近辺で取引開始後も売り進まれることなく底堅い展開。しかし、その後米ドルが急速に買い進まれる展開に、豪ドルはストップロスを巻き込みながら0.7160台まで急落。下げ一服後は一旦0.72近辺まで買い戻されたが、米追加経済対策にかかる協議が再び物別れに終わったことや、米製薬会社によるコロナ治験停止の報道が一段とリスクオフの動きを強め、豪ドルは0.7160台まで下落した。14日、豪10月消費者信頼感指数が前月比11.9%上昇と消費者センチメントの回復を裏付ける結果に、0.7170台まで小幅上昇。15日、ロウRBA総裁による講演を受けて追加緩和観測が高まり、一旦0.7130台まで下落。その後発表された豪9月雇用統計では、失業率が6.9%と市場予想の7.0%ほど悪化しなかったものの、前月の6.8%から小幅上昇。ただし雇用統計を受けた豪ドルの反応は限定的だった。欧米時間に入り、欧州でのコロナ第2波が意識される中、リスクオフの動きが強まり米ドル全面高の展開に、豪ドルは一時0.7050台まで下落。その後、トランプ大統領がより大規模な追加経済対策を支持する発言をすると、協議への期待感から豪ドルは0.7090台まで戻して引けた。16日、前日のロウRBA総裁講演を受けて豪ドルは上値重く、0.7090台を中心にもみあい。

今週の豪ドルは上値の重い展開を予想する。先週のロウRBA総裁の講演では、(1)少なくとも3年は利上げを想定しない、(2)RBAの国債買い入れによるバランスシートの拡大は他国と比較して限定的となる、(3)5～10年の長期年限の国債買い入れが雇用を下支えするかどうか検討している、等のコメントが注目され、利下げ観測を一段と高めた。欧米各地でコロナ新規感染者が再び増加し、リスクムードが悪化する中、少なくとも実際に利下げが実行されるまでは豪ドルの上値を追う動きは限定的なものになると考える。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/12～10/16)の値動き:　(対ドル) 安値 0.7057　高値 0.7234　終値 0.7078

(対円) 安値 74.26　高値 76.52　終値 74.63



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。